

ま どり 真 鳥



ま どり
真鳥住む

う な て も り
卯名手の社の

すが
菅の根を

きぬ
衣にかきつけ

着せむ子もかも

卷七―一三四四 作者未詳

歌意 鷺の住む(恐ろしい、しかも神聖な)卯名手の社の菅の根を(危険を冒してでも採ってきて)衣に結びつけ着せてくれるかわい子がいたらよいのに。

真は、松・杉・檜が良材で樹木を代表するものとして、真木というように、鳥の代表として鷺を真鳥としている。

鷺の種類は、イヌワシであれば、大和平野には飛来しないし、オオワシも海のない大和平野に住むということはない。ここはオジロワシで、大和平野には磐余・埴安など大きな池があつて魚を捕って生活出来たであろうし、卯名手の社は神奈備で大きな樹があつてオジロワシの埒であつたと想像されます。菅の根は、心根深い愛の比喩です。